OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Word Grammar による動詞活用へのネットワーク的アプローチ : 現代日本語における動詞連用形の形態統語論的分析
Author(s)	吉村, 大樹
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2011, 6, p. 85-111
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Word Grammar による動詞活用へのネットワーク的アプローチ
― 現代日本語における動詞連用形の形態統語論的分析 ―

吉　村　大　樹*
YOSHIMURA Taiki

Abstract :

A Network Approach to Verbal Inflection from the Word Grammar Viewpoint: A Morpho-syntactic Account of the Continuative Form in Modern Japanese**

In this article, I will argue that Word Grammar (henceforth WG) can correctly predict when the verb is realized as the continuative form (“Ren-you-kei”) in Japanese. Tagawa (2008a, 2008b) claims that the verb is realized as the continuative form unless it is related with any element of Tense (e.g. [+Past] [-Past]) for several reasons. His analysis also predicts that the continuative form will appear, if a) another element (e.g. the past tense marker ‘-ta’) co-exists in the Tense/TenseP domain, or b) a tense-related element is deleted, which is triggered by an element such as ‘-te’. Contrary to Tagawa (2008a, 2008b), the present analysis, carried out within the framework of WG, assumes that the verb is ‘by default’ realized as the continuative form if it does not inherit any specific inflectional properties such as negative, non-past tensed (also known as ‘conclusive’), and imperative. Accordingly, any verb may appear as the continuative form, on the condition that it cannot inherit any specific inflectional properties, because the syntactic ‘parent’ (i.e. the syntactic head) requires the verb in question to take the form of continuative, or simply it does not inherit any inflectional properties. This article argues that the core of our analysis in this paper is quite similar to Tagawa’s account, apart from the fact that

＊　大阪大学世界言語研究センター・特任助教

＊＊　本稿の執筆にあたって、草稿に関して様々なご指導・ご助言をいただいた菅山謙正氏、論考について様々なヒントをくださった佐藤直人氏、あわせて日本語の先行研究、およびご自分の論考を含む様々な関連する文献についての情報をご教示いただいた田川拓海氏、また匿名の 3 名の査読者の各氏に感謝の意を表したい。とりわけ草稿の段階からいただいた田川氏の数々のご助言やご指導に対し、特に謝意を表するものである。各氏をはじめとする多くの方々のご協力にも関わらず、本稿における過失の一切は筆者に帰するものである。

なお、本稿は科研費基盤研究 (A)「地球化時代におけるアルタイ諸語の急速な変容・消滅に関する総合的調査研究」（研究代表者：久保智之、課題番号：21251006）、および同基盤研究 (C) 科学研究費補助金　基盤研究 (C)「発展した New Word Grammar による現代英語の構造の包括的研究」（研究代表者：菅山謙正、課題番号：23520587、いずれも敬称略）の支援を受けている。

WG dispenses with any syntactic operation such as movement or deletion. The WG-based account supersedes Tagawa (2008a, 2008b) within the framework of Distributed Morphology (DM), in that our WG-based analysis, which assumes a unified conceptual network with two principles, i.e. Default Inheritance and Parent Valency, identifies the conditions of appearance for the continuative form. In contrast, DM needs several rules which prevent the verb in question from being related to any element of Tense.

Keywords：modern Japanese, verbal inflection, continuative verbal form, Word Grammar
キーワード：現代日本語，動詞活用，動詞連用形，ワードグラマー

1．はじめに

現代日本語におけるいわゆる動詞の活用（形）については、多くの研究の蓄積がある。その中で、三原［2011］や田川［2008a, 2008b］はそれぞれ説明の手法においては細部に違いが見られるものの、何を活用（形）と認定するのか、語／語幹／活用語尾とは何か」といった問題を設定し、それに対する回答を提示するのではなく、生成文法の立場から動詞の統語論の領域における振る舞いを形態論とあわせて説明しようとしている。このことにより、なぜある統語的環境において特定の形式が具現化するのかを明らかにしようというのが彼らの研究の目的といえる。特に田川［2008a］では分散形態論 (Distributed Morphology, DM) の枠組みを用いて、なぜ様々な統語的環境下においていわゆる「連用形」と呼ばれる形式が具現化するかを説明できる理論的枠組みを提供していることが注目に値する。

本稿の目的の一つは、なぜ動詞のいわゆる「連用形」と呼ばれる特定の形式が複数の環境下で具現化するかを説明することにある。この点では田川［2008a, 2008b］と目標を同じくするが、いわゆる生成文法を前提とする彼の理論的枠組みに対し、筆者の支持する Word Grammar (WG) 理論の立場からはどのような説明が可能であるかを明らかにするのがもう一つの本稿の目的である。このことにより、田川［2008a, 2008b］では、「連用形」が出現する個々の現象の説明には個々の規則や統語上での要素の移動といった、いくつかの道具立てをそれぞれ別々に適用しているのに対し、WG の枠組みはどの現象に対しても、あらかじめ理論上定められている原理（本稿の枠組みに関しては Parent Valency, Default Inheritance の 2 つ）を前提とした単一的なネットワークという枠組みで説明でき、要素の移動や削除といった複雑な操作を必要としない」という点で優れていることを主張する。

２．日本語の動詞連用形の出現環境

本稿の議論の対象は動詞の様々な活用形の中でも、いわゆる連用形と呼ばれる形式である。まず、本稿で扱う連用形とはどのような形態を指すのかを確認しておきたい。[1]

(1)　壊し　て
　　連用形　　「て」（「壊して」全体で「テ形」）　　［田川 2008a: 60］

田川［2008a］が指摘するように、(1) において、「壊して」全体を動詞の連用形とする立場もあり（Bloch [1946] 寺村［1984］）、「連用形」と呼ばれる形式の名称がどのような形態を指すのかは研究者の立場により異なるが、ここでは田川［2008a: 60］にしたがい、「ます」や「ながら」に前接する動詞の形態と同一の形態すべてを指すことにする。

前述したように、連用形に関わる問題とは、同一の形式が複数の異なる環境下において出現することである。具体的にどのような場合に出現するかについて、田川［2008a: 61-62］では以下のようにまとめられている。

(2)　動詞の直後に取り立て詞が介在する場合
　　大声をあげすらする。

(3)　一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接する形態として現れる
　　彼女は今にも泣きそうだ、テレビを見ながら、etc.

(4)　ある種の接頭辞や語彙的要素が付加する場合に、「X ＋動詞連用形＋する」という連鎖の一部として現れる
　　走る →小走りする／ * 小走る、笑う →高笑いする／ * 高笑う , etc.

(5)　動詞句や動詞そのものに付加し範疇を変化させる接尾辞の前に現れる
　　雨の降り方、政権の担い手、etc.

1　以下、とくにことわりのない限り、例文は田川［2008a］より引用する。
本稿でいう「連用形」は、研究者の立場によっては「語幹形」とも呼ばれている。例えば三原［2011: 73］では「語幹形が形態変化を伴わずに顕現するのが連用形」であると延べ、さらに同頁の脚注 4 で子音語幹に後続する {-i} を「緩衝母音とし、統語論的に見る活用形とは無関係である」と述べている。本稿でこの形式を語幹形と呼ばず、あえて連用形と呼ぶ理由は、この {i} がどのような性質のものであれ、形態上はやはり変化しているとみなすことができることによる。ただし、子音語幹動詞の活用において変化しない部分に次いで {i} を伴いながら（また、母音語幹動詞は {i} を伴わずに）具現化するような理論的枠組みを提示することを目標としている点では、三原［2011］をはじめとする多くの立場とも対立しないと思われる。

(6) 複合語の要素として現れる

a. 統語的複合動詞、語彙的複合動詞の前項要素になる。

→ 走り続ける、殴り殺す

b. V-N の連鎖の複合語の前項に現れる。

→ 打ち上げ花火、入れ知恵、置き手紙、etc.

(7) 連用形そのままで名詞として使用される

泳ぎ、争い、眠り、へこみ、詰まり、つまみ、すり、etc.

以上の例から、いわゆる連用形形式は多様な環境に出現することがわかる。繰り返しになるが、問題はなぜこれほど多様な環境に同一の形式が出現するのか、連用形はそもそもある特定の文法的意味と 1 対 1 で対応しているのか、そしてこれらの問いに対して文法的枠組みを用いた分析はどのような解答を与えうるか、といったことである。本稿ではこれらの問いに対する解答を提示した田川［2008a, 2008b］に対し、WG の立場からの解答を提示することを目的としているが、その前に田川［2008a, 2008b］が本稿と全く異なる立場からどのような解答を与えているかを次節で確認しておきたい。

3．田川［2008a］田川［2008b］の分析

3．1　理論的枠組み

田川［2008a］田川［2008b］は、分散形態論 (Distributed Morphology, DM) の枠組みを用いて日本語の動詞連用形の出現予測を試みている。この分析によると、活用とは文法的環境と対応して述語が異なる形態をとる現象」と定義される。また、この枠組みでは以下の仮説に基づいて分析を行う。

(8) a. 活用形の決定に関する仮説。最終的にどの活用形が具現するかは、統語構造における情報によってのみ決定される。

b. Late Insertion: 語彙挿入 (Lexical Insertion) は統語部門の計算が終了した後に行われ、その時点で形態、音声的内容が決定される。[2]

(8) における 2 つの仮説は、生成文法において言語能力が各種の下位部門からなることを保

2　いわゆる動詞の活用に何種類のものを認めるかは研究の目的、研究者のよってたつ枠組みにより異なる。また、田川［2008a］では仮定形を活用として扱うべきかどうかという議論があることを考慮に入れ、(10) の各種形態論的規則の一覧の中には含めていない。本稿でも議論をいわゆる連用形に集中する目的もあり、田川［2008a］に従い仮定形については議論から除外することにしたい。

持するという点においても必要なものであると考えられる。また、具体的な動詞の活用に関しては、下記 (9) の部分集合原理 (Subset Principle) に基づき、具体的に (10) のように各活用形に関する形態論的規則を明示する田川［2008a: 63］。

(9)　部分集合原理:その言語の持つ形態論的規則の中で、形成された統語の情報に対して「完全に規則に一致する形態」ではなく、「最も規則に適合する形態」が挿入される。

(10)　動詞の活用形に関する形態論的規則 [3]

a. {V [+V], C [+Imp(erative)]} ↔ V + /e/, /ro/	命令
b. {V [+V], T [-Past]} ↔ V + /(r)u/	終止
c. {V [+V]} ↔ V が子音語幹動詞の場合 /a/ を挿入 / _Neg	未然
d. {V [+V]} ↔ V が子音語幹動詞の場合 /i/ を挿入	連用

これにより、たとえば {V[+V], X, T [-Past], Y}（ここで X, Y は (10) の規則群に含まれていない任意の素性を表す）という例があるとすると、ここでは 4 つの素性が存在することになり、(10) の各規則に照らし合わせた結果、最も一致が多いのは (10b) の終止形形成規則であることから、動詞の形態は終止形となる（田川［2008a : 64］）。また、(10) の諸規則のうち、(10d) の連用形形成に関する規則は最も指定が少ない規則であるが、この規則は DM では Elsewhere condition と呼ばれる、より指定が多い他の形態論的規則のいずれにも該当しなかったときに常に適用されるものであり、その点において連用形は最も一般的な形態であるということができる（田川［2008a: 64］）。

また、2 節で述べたように連用形が句のレヴェルにも語形成のレヴェルにも出現することを説明するために、DM では以下のような仮説を採用し、語形成を取り扱うための独立した部門を想定しない。

(11)　Single Engine Hypothesis (There is no “generative” lexicon). それがいかなる要素であっても、何かを ” 組み合わせる ” 操作は、全て syntax で行われる。統語部門と独立した、語形成が行われる部門は存在しない。

この結果、DM の枠組みでは、語形成レヴェル、句レヴェルのいずれの要素も統語部門において計算され、その出力に対して (9) の規則が適用され、どの形式で出現するかが決定されるということになる。

3　田川［2008a］によれば、いわゆる変格活用を持つ動詞については、個別に形態論的規則を措定する必要があるという。また、(10c) に見られる記号 “/” の後は形態を挿入する際の様々な付加的条件であり、ここでは概略「後ろに否定要素がある場合」と考える。

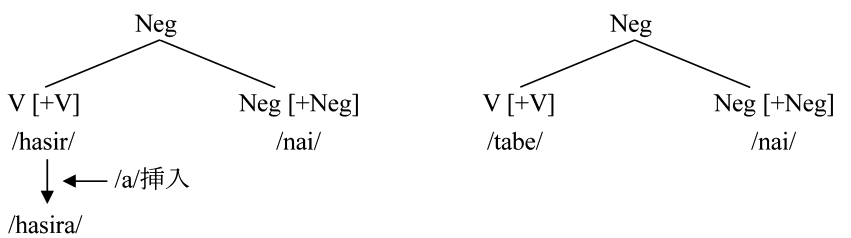
３．２　子音語幹、母音語幹の区別の扱い

連用形については、子音語幹動詞、母音語幹動詞でも形態的振る舞いに違いがあるので、両者の扱いをどうするかも本稿の考察に関連があると思われる。田川［2008a］田川［2008b］では形態論上の子音語幹動詞､母音語幹動詞の差異について以下のように述べている。まず、終止形については以下のような構造をそれぞれ与えている。(12a)「走る」は子音語幹動詞、(12b)「食べる」は母音語幹動詞の一例であることを確認されたい。なお、(12a) では時制形態素 /ru/ の頭子音が子音連続を避けるために削除されるとしている。

(12)　a. 走る　　b. 食べる

ここでは､語幹部分（V[+V] に挿入される形態）といわゆる活用語尾に当たる部分（V[-past]）に挿入される形態）の対応関係は子音語幹、母音語幹動詞ともに並行的である。一方、未然形については以下 (13) のような構造を与えている。

(13)　a. 走らない　　b. 食べない



ここでは、いわゆる語形変化に対応する操作は子音語幹動詞についてだけ起こっており、母音語幹動詞については特に何も起こらないとしている。これは連用形の場合も同様である。このような構造を与えることにより、特に母音語幹動詞の場合、(10) の規則群のうち、命令形、終止形に関わる規則だけを参照すればよいことになる。

３．３　各環境の連用形出現の予測

前節までの枠組みを用いて、田川［2008a］田川［2008b］では様々な連用形の出現環境に対してどのような説明を与えているのかを本節では見ることにしたい。まず､(2) の環境「動詞の直後に取り立て詞が介在する場合に現れる」場合の構造は次のように与えられている。

(14) a. 弟を殴りすらする。

b. [$_{TP}$[$_{VP}$[$_{XP}$[$_{VP}$ 弟を nagur] すら]t_i] する $_i$]

このような現象については何通りかの分析の可能性があることを指摘した上で、田川［2008a］では動詞語幹と時制要素の間に取り立て詞が介在していることに着目し、この取り立て詞が動詞語幹と時制要素への直接的な関連づけを阻害する、と説明している。一方で動詞「する」は時制の支持 (support) のために出現するとし、こちらの動詞は T[-Past] と構造的な関係を保てるために、終止形形成規則が適用されていると考える。

次に (3) の環境、「一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接する形態として現れる」場合には、そもそもそれら（つまり、助動詞や接続形式）がとる補文内に TP レヴェルの投射が現れないとしている。その根拠となるのは (15) のような例で、確かに T[+Past]（つまり、過去時制）に対応する「た」は現れることができない。

(15) a. *私がやったます。

b. *テレビを見たながら論文を読んだ。

c. *本を買ったに行った。

したがって、これらの動詞語幹は T[-Past] とも関係を持つことができず（したがって終止形としても出現しない)、連用形となることが予測できる。

(4) の環境「ある種の接頭辞や語彙的要素が付加する場合に、「X + 動詞連用形 + する」という連鎖の一部として現れる」場合は、(16) で示すように、接頭辞「小」のような要素が動詞に付加することによって上位の主要部へ移動することができなくなり、T[-Past] と関係をもつことができず、動詞語幹の部分は連用形になると説明できる。[4]

(16) a. 小走りする

b. [$_{TP}$[$_{vP}$[$_{VP}$ ko-basir] $_v$] する]

また、(5) の「動詞句や動詞そのものに付加し範疇を変化させる接尾辞の前に現れる」ような環境、あるいは (6) の「複合語の要素として現れる」ような環境においてはいずれも同様の説明が与えられている。すなわち、これらの環境下では構造内に句レヴェルの上位の機能範疇である T の主要部が出現することがない。語形成に関わる要素として動詞が全て連用形で出現するのは、この理由によるものである。

最後に、(7)「連用形そのままで名詞として使用される」場合もやはり時制範疇 (T) と関連

4　このような環境下の連用形の出現に関する詳細な分析については田川［2005］を参照されたい。

づけができないと DM の枠組みでは説明することになる。このような環境下における動詞連用形の形式はいわば動詞派生名詞であり、DM の枠組みでは以下のような構造が与えられる。

(17) a. 泳ぎ
b. [N[V oyog [+V]] Ø [+N]]

田川［2008a, 2008b］は、連用形それ自体が名詞化の機能を果たしているわけではなく、統語的に名詞として認可された時点でこの要素が直接 T[-past] と関係を持つ可能性はなくなると指摘している。たしかにこのように考えることにより、「思わせぶり」(omow+(s)ase+bur+Ø[+A])（思わせぶりな態度）のような形容（動）詞となるような場合を例外的に扱う必要がないという利点がある。

３．４　連用形が T あるいは T[-past] と関係を持つときに現れる連用形の扱い

ここではさらに、田川［2008a］で論じられている二つの環境について検討しておきたい。まずは、非過去形と過去形の非対称性についてである。

(18) a. 指す：{V[+V], T[-Past]} → 終止形 (cf. (10b))
b. 指した：{V[+V], T[+Past]} → 連用形　＋「た」(cf. (10d))

(18) から、DM の枠組みでは TP という同じ大きさの統語的構成素を形成する場合でも、(18a) のように T にある部分の素性が [-Past] という素性を有するときは終止形があらわれるのに対して、(18b) のように [+Past]、つまり過去時制素性がプラスの値を有するときには連用形が出現する。これも、(10) の各規則から容易に導き出すことができる。

もう一つの環境は、テ形節に前接する場合である。

(19) 太郎はおもちゃを壊して、母親に怒られるに違いない。

ここでは、従属節（つまりテ形節）内に時制辞を含む場合があることが指摘されていて、かつその素性は [±Past] 両方が可能であるという。このような例は一見問題となるように思われるが、田川［2008a, 2008b］では (20) のような例から、時制辞が削除されると仮定することで従属節の動詞が [±Past] 素性のいずれとも関連を持つことができないと考えるのである。[5] そうすれば、当然出現するのは連用形形式ということになる。

5　ただし、時制辞句 (TP) あるいはその主要部 T それ自体が削除されるわけではないことに注意しておく必要がある（田川氏との私信より）。ここでは、T にあるはずの [±Past] 素性だけが削除されると仮定されていることに注意されたい。

(20) a. 太郎はおもちゃを壊し（* た）て、母親に怒られた。
　　b. * 太郎はいつもおもちゃを壊すて、母親に怒られる。

以上、田川［2008a], 田川［2008b］による説明を概略的に紹介してきた。DM という理論的枠組みを採用し、それに伴いいくつかの原理と規則を用いることにより、生成文法の枠組みを保持しつつ、意味と機能の多対多の関係をうまく説明できていると思われる。田川［2008a, 2008b］で彼自身が主張しているように、DM の分析の利点は「A という環境で B という形態が現れている」ということに対する分析だけでなく、どのような形態が出現するかという予測が自動的に行われるような枠組みを提示している点である。本稿の目的はこの枠組みに対して、動詞連用形出現の予測という同じ目標を設定した際に、筆者の支持する WG の枠組みがより簡潔に、かつ統一的な手法でこの目標を達成できることを示すことである。

４．Word Grammar

本節では、本稿で採用する WG の枠組みについて、本稿における分析に必要な限りの概略を述べることにする。

４．１　概念のネットワーク

WG では、言語知識を様々な概念が網の目のようにつながったネットワークのようなものであると考える（Hudson [2007], Hudson [2010]）。このネットワークは、実体 (entity) をあらわすノードと、それらを結びつける関係 (relation) からなる。具体例として、Hudson [2003] で示されている例文をとり、WG でどのように分析されるのかを見てみることにしよう。

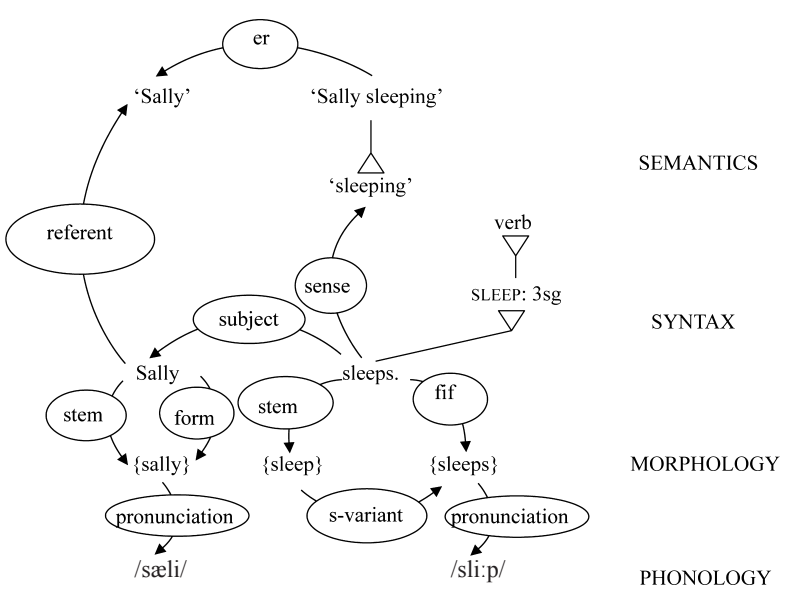


図 1

図 1 では、英語の Sally sleeps. という文について、意味構造から統語、形態、さらに音韻レヴェルに至る様々な関連するカテゴリーがネットワークの枠組みで表示されている。[6] 以下、簡潔に各レヴェルで表示したことの概略を箇条書きで述べておきたい。[7]

- まず統語レヴェルでは、（固有）名詞 Sally は述語動詞 sleeps に統語的に依存しており、その依存関係は「主語」(subject) の関係であるといえる。また、sleeps は語彙素 SLEEP、さらに屈折要素として 3 人称単数という値を継承した語の一種である（SLEEP: 3sg)。語と語の依存関係が WG の統語構造の基本的枠組みであり、生成文法など多くの理論で採用している句構造の代わりに用いられる。
- 統語的関係の上部に表示されている意味レヴェルでは、動詞が語義 (sense) として ‘sleeping’ という概念を有しており、さらにこの文の動詞は ‘Sally sleeping’（Sally が寝ていること）という具体的な意味を有している。また、この動詞があらわす意味の行為者 (er) は、統語上の主語である Sally の指示対象 (referent) である。これらの意味関係は、たとえば生成文法の枠組みでの意味役割（θ 役割）の表示におよそ対応している。
- 統語関係の下部で表示した形態レヴェルでは、動詞 sleeps の語幹 (stem) が {sleep} という形式であり、さらに sleeps が形態論上 {sleeps} という完全屈折形式 (fif) を有していることが表示されている。同様に主語 Sally の語幹は {sally} であるが、この語の最終的な語形 (form) も語幹と同じ形式、すなわち {sally} である。
- 形態レヴェルのさらに下部では音韻レヴェルが表示されており、形式 {sally}、{sleeps} はそれぞれ /sæli/, /sli:p/ と発音 (pronunciation) される。

6　図 1 は Hudson [2006: 14] で提示された文の分析である。この図から明らかなように、各概念どうしを結ぶリンクは（後述する isA 関係は除くが)、2 つの概念がどのような関係であるかを楕円形内部にラベルで明示する。これは最近の WG の表記法に従ったものである（Hudson [2010])。
なお、同図のラベルには略記号を使用している。各ラベルの指す内容は以下の通りで、特に断りのない限り本稿では以降同様の略記号を使用する：s ＝主語 (subject)、r =「共有者」(sharer, 主語または目的語を共有する関係)、o= 目的語 (object)、c= 補語 (complement)、a+= 前位付加語 (preadjunct)、ref= 指示対象 (referent)。また、意味構造における er, ee という 2 つのリンクは WG で使用される関係概念で、大まかにある事象の行為者 (er)、およびその事象において影響を受ける概念 (ee) であることを表している。また、「共有者」という文法関係については、Hudson [2010] では新たに p（「叙述」、predicative の略記号）というラベルに変わったが、従来の「共有者」関係が常に叙述関係を表すとは思われないことから、本稿では引き続き r というラベルを使用することにする (cf. Yoshimura [ms.])。

7　ある査読者氏より、図 1 で表示するようなネットワーク、実体を表すノード、それらを結びつける関係などが「なぜ」有効なのかを方法論として明確に規定する必要があるというご指摘をいただいた。それは確かにその通りであるが、これは WG 以外の理論的枠組み全体に対してもあてはまることであり、経験的に証明されるべきものであると考える。WG では「人間の言語に関する知識は網の目のようにつながったネットワークである」として、図 1 のような知識のネットワークという構造があるということを言語事実を分析・説明するための前提 (postulate) としている（Hudson [2007: 1])。本稿では、この前提を支持した上で論を展開することにする。

４．２　isA 関係と「特質の継承」

さて、図 1 ではほとんどのノードどうしが楕円形内部に表示された関係概念を伴いつつ曲線の矢印で表示されているが、それとは別に、三角形付きの直線で異なるノードを関連づけているものもある。これは WG の枠組みでモデル・インスタンスの関係（isA 関係）を表示するのに用いられる表示である。[8] このとき、三角形の底辺はより一般的なカテゴリー（モデル）のほうを向いているが、これは上位カテゴリーのもつ特質が下に向かって降りていくという「特質継承」を比喩的にあらわしていると考えるとわかりやすいかもしれない。isA 関係については、吉村［2009: 169］でも図 2 のような例を与えているが、最近の枠組みでもこの表示方法は変わっていないので、本稿でも引き続きこの表記法に従う。

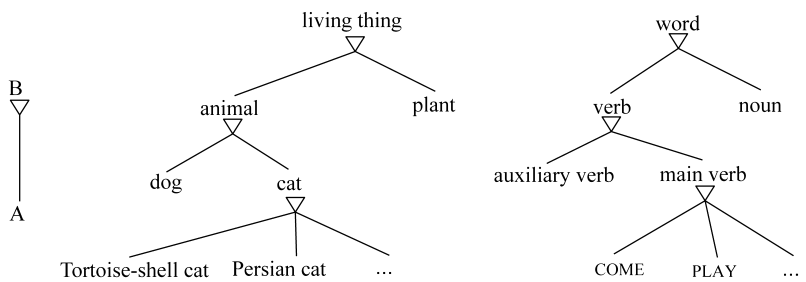


図 2

図 2 の左に表示されているように、あるカテゴリー A が別のカテゴリー B に対してモデル・インスタンスの関係にあるとき、この関係を A に向かって B から三角形付きの直線の矢印で表す。図 2 の中央部分では三毛猫 (tortoise-shell cat)、ペルシア猫 (Persian cat) 等々の（相対的に）具体的なカテゴリーはより一般的なカテゴリーである cat と isA 関係を有し、究極的には生物 (living thing) にまで連続的に isA 関係の階層を認めることができる。このような階層は文法、語彙を含めた言語知識の分類にも応用される。図 2 右に示すように、たとえば英語の語彙素 COME, PLAY 等は具体的なカテゴリーであり、やはりより一般的なカテゴリーである主動詞 (main verb) と isA 関係にあり、さらに “main verb isA verb”, “verb isA word”... といったような、いわば他動的 (transitive) な階層が認められる。

WG で導入されている isA 関係については、あるカテゴリーは複数の別のカテゴリーと isA 関係を有していてもよい。これは日常の我々の思考でもきわめて常識的なことと考えられている。たとえば、「犬」という概念は「ほ乳類」の一例であるし、同時に「ペット」の一例である。これは言語に関する知識でもやはり同様で、たとえば英語の ATTEMPT という語は動詞の一例であると同時に、英（単）語 (English word) の一例であり、さらには儀礼的な

8　最近の WG では、“isA” の最後の a を大文字で表示している（Hudson [2010]）。本稿でもこの表記に従うことにする。

語 (formal word) の一例でもある (Hudson [2007])。このように、WG ではある概念が複数のカテゴリーと isA 関係を有する (mutliple isA) ことを、図 3 のようにやはり三角形付きの直線で表示する。

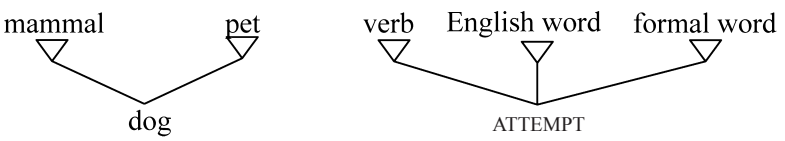


図 3

さて、2 つの概念が isA 関係で関連づけられるとき、A は B が有している特性を継承する（インヘリタンス）という論理操作を WG では採用しているが、この枠組みは日常の経験、あるいは言語知識上の経験を処理するのに必要なものと考えられている。たとえば、ネコは通例前脚と後脚で、計 4 本の脚をもっている。さて、今我々の目の前にあるネコがいて、このネコは不幸にも脚を 1 本失ってしまっていると仮定しよう。ここで単純な推論を行うならば、「ネコは通例足を 4 本もつが、この生物の足は 3 本しかない。したがってこの生物はもはやネコではない」という帰結を導く。しかし現実の理解としては、我々はこの生物を「脚を 1 本失ってしまったネコである」とみなすはずである。

このような例外的事実を許容する論理操作を、WG の枠組みでは、個々の具体例 (exemplar) が特別な値をもっていればその値が優先されるが、それ以外のことについては全て isA 関係があるより一般的なカテゴリーから継承する（デフォルト・インヘリタンス、以下「特質継承」と呼ぶことにする）と説明される。今のネコの例で言うならば、このネコの足の数は 3 本であるが、この特性は個体としてのこのネコがもつ「特別な値」であり、それ以外の特徴、たとえば体毛で覆われている、哺乳類に属する、などの特徴は全てより一般的な「ネコ」というカテゴリーから継承されるということになる。これを WG のネットワークの枠組みで簡略的に図示化すると、以下図 4 のようになる。[9]

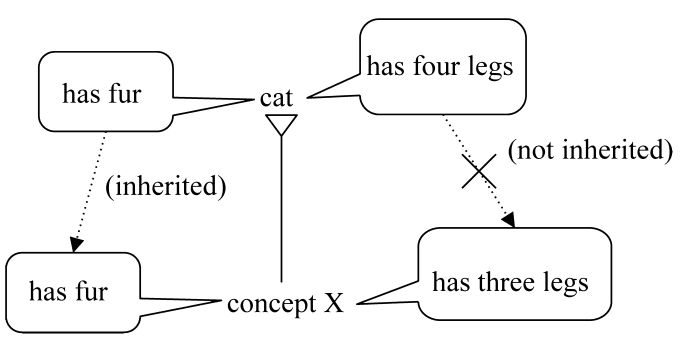


図 4

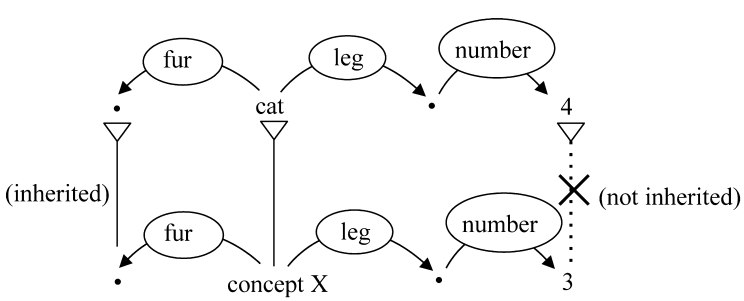
図 4 での concept X とは便宜的に与えられた名称であり、先ほどの例でいう具体例、つまり「目の前の具体的なネコ」を指し示す。この concept X とカテゴリーとしての cat が isA 関係で関係づけられているとすれば、インスタンスである concept X は、モデルとなるカテゴリー cat のもつ特性を、独自の（かつ互いに矛盾する）特性を持たない限り継承する。したがって、たとえば脚を 1 本失ってしまったネコは、上位カテゴリーの有する「脚が 4 本ある」という特性は継承しないが、たとえば「体毛がある (has fur)」といったそれ以外の特性はそのまま継承するということになる。

４．３　活用形式の指定について

本節では、WG の枠組みで日本語動詞の活用体系をどのように扱うのかを明らかにしておきたい。すでに DM の枠組みで、未然形、終止形、命令形、連用形の形態規則を設定し、実際の構造ではそれらの規則に最も近いものが選ばれるということを見てきた。一方 WG の枠組みでは、そもそも活用に関する個別の規則を必要とせず、言語知識の一部としてネットワークの中に組み込まれると考える。

第 3 節では、DM の枠組みにおいて用いられた形態論規則には命令形、終止形、未然形、連用形の 4 種を認めていることを確認したが、まずこれらの活用を WG でどのように考えるか、本稿における見解を提示しておきたい。活用という概念は WG でいう屈折 (inflection)

9　図 3 で表示されている「吹き出し」の中の文章は、そのカテゴリーが有している特性を表示している。これは Hudson [2010] にならった表示方法であるが、多くの場合これらの特性は別のカテゴリーとの関連をもたらす。たとえば cat の有する ‘has four legs’ という特性は、究極的には cat と leg（さらには「4」という数量的概念も厳密には含まれる）という 2 つのカテゴリーとを関連づけることになる。したがって、より精密にネットワークとして表示するならば、以下の参考図 1 のように表示することになるだろう。要するに、図 4 ではあくまで便宜的にデフォルト・インヘリタンスを説明するために便宜的に用いた表示方法を用いているということである。



参考図 1

上図において、ドット（・）で表示しているノードは、そこに何らかの実体が存在することは明らかであるが、どのように呼べば（名付ければ）よいか不明なノードであり、WG ではそのようなノードを便宜上このように表示することにしている。

に対応すると考えてよいように思われる。WG の枠組みでは、屈折に関する情報は前節 4.1 で提示したような isA 関係を用いて表示・説明することができる。まず英語の簡単な例として、played が語彙素 PLAY の過去形であることを WG ではどのように表示するかを以下図 5 で見てみよう。

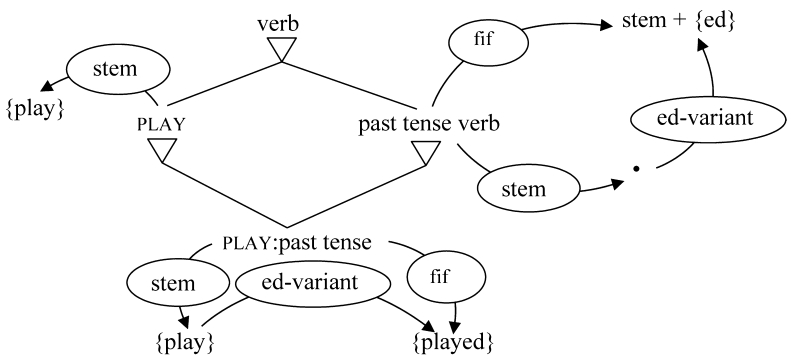


図 5

図 5 のうち、右上部分にある「過去時制動詞」(past tense verb) を表すノードが屈折（活用）に関する情報の継承を担うノードである。このカテゴリーが、「その形式は語幹部分に ed 形式を付加した変化形式」（WG ではこのような変化形式を ed-variant 等と表す）とでもいうべき特性を有しているとする。このとき、語彙素 PLAY とこの屈折に関する情報を isA 関係により同時に継承したノード（図 5 では PLAY: past tense と表示されている箇所）が、{play} を語幹とし、かつ ed-variant としての変化形式 {played} を完全に屈折した形式（fully inflected form, WG では fif と略記する）として有している。以上のことが図 5 では全て表示されているが、特に屈折形態論に関しては語とその屈折形式との関係の表示が適切に行われていることが重要である。WG の枠組みでは、屈折に関する属性（たとえば時制や人称、数など）とそれらの値（たとえば「過去」、「1 人称」、「複数」など）を、このようにあえて isA 関係ならびに特性の継承を用いることで説明する。[10]

10 DM や生成文法をはじめとする多くの文法理論が [+Past][number: plural] といったような属性 - 値の枠組みを用いて形態・統語的特性を説明しようとするのに対し、WG でこのように素性表示をあえて isA 関係で説明しようとする理由は、この形態・統語的特性というカテゴリーの分類の方法が（その名が示すとおり）形態論あるいは統語論でしか使用できないとみなしていることによる。つまり、WG では概念の分類の方法として isA 関係に基づく方法のみを言語レヴェルの如何にかかわらず汎用的・統一的に使用するために、あえて「属性－値」という分類方法を採用しない [cf. Hudson 2007:68-72]。

今問題になっている日本語の屈折カテゴリーについて、同様に isA 階層を用いて表示するとどうなるであろうか。ここでは今後さらに検討が必要であるが、[11] ひとまず本稿では第 2 節の議論にならう形で未然形、終止形、命令形、連用形の 4 種のカテゴリーに関して、図 6 のようなものになると仮定したい。

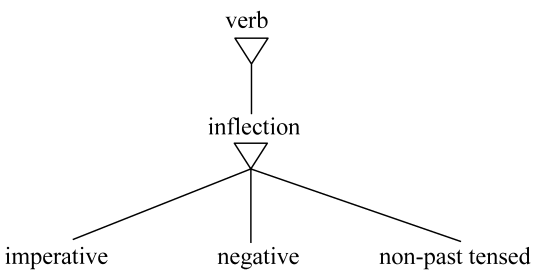


図 6

本稿でも田川［2008a］，田川［2008b］と同じく、活用の名称をそれぞれの形態に対する純粋なラベルとして採用することとし、各名称そのものに「（連用形は）用言に続く形式である」、「（終止形は）そこで文が終わる形である」といったことを含意しない。したがって、活用の分類は純粋に形態的同一性によってのみ行われるという立場をとる。

図 6 で negative というノードを設定したが、これは第２節で紹介した田川［2008a］，田川［2008b］と同様に「未然形」と便宜上呼んでいる動詞活用のカテゴリー、つまり単に動詞語幹に {a} が付加された形式（たとえば、「殴る」という動詞であれば {nagura} の部分）のことを指す。[12] 同様に、imperative は動詞の「命令形」として、non-past tensed は「終止形」として具現化される語というカテゴリーを表している。ここで重要なことは、「連用形」に相当するノードをあえて命令形、未然形、終止形といったカテゴリーと並列した形で認めないということである。別の言い方をすれば、連用形は「デフォルト」の形式であり、もしあ

*11 WG の枠組みを用いた日本語の分析において何種の屈折カテゴリーを認定するべきかは、本稿の目的から逸脱するため扱わないことにする。これについては稿を改めて論じることにしたい。

12 ところで、多くの研究では活用としての未然形を認定していない（たとえば三原［2011］、寺村［1984］、三上［1953］など）。これは、語幹に後続する {a} がそれ自体は「特定の意味、特定単一の名で呼べるような職能は認められない」寺村［1984: 43］ことによるものであり、{a} は後続する nai の一部、すなわち -(a)nai という形態として捉えられている。これに対し、田川［2008b: 52-53］では「太郎はテレビを見ない／ * 見あない」という例を挙げ、母音語幹動詞に -(a)nai が付加された場合には母音 {a}（田川［2008］では /a/ と表記）が付加されないことを形態論的に規定する必要があること、また「太郎は薬を飲まず（に）寝てしまった」(nom-a-zu-ni)、「あいつはそれくらいじゃ死なんよ」(sin-a-n) といった例を挙げ、否定辞 nai 以外の要素の前で /a/ という母音が出現することが体系的に捉えられなくなることから、{a} を nai の一部とはみなさないという立場をとっている。本稿でもこの立場に賛同し、{a} を動詞語幹に付着する要素とみなす。

る動詞の活用として命令形や未然形、終止形など具体的な形式に関する「値」が与えられればその値が優先されるが、それらの特別な値がなければ、その動詞形式はデフォルトとして従来の用語で言う連用形としての活用の値が与えられることになる。図 6 に、各活用形の形態論的情報をさらに追加したものが以下図 7 であるが、この図では DM の枠組みにおける (10) で提示した形態論的規則がネットワークの一部として組み込まれているというのが重要なポイントである。[13] つまり、前述した特質継承、あるいは統語論上の不連続構成素の排除のために用いられる「交差不可原理」(the No-tangling Principle)（参考：吉村［2010］）といった、きわめて限られた数の「原理」をのぞけば、WG の枠組みでは他の枠組み、少なくとも DM で「規則」としてとらえられているものをネットワーク内の知識の一部として記述するため特別に設定する必要がないという利点がある。[14] なお、図 7 の図中にある波括弧｛｝は、各ノードが形式を表示していることを表す。また、本稿では Haspelmath and Sims [2011: 20] にならい、語幹 (stem) を屈折接辞が付着する部分と一応定めておく。したがって動詞「走る」を例にとると、hasir-a, hasir-i, hasir-u, hasir-e, といったような語形変化があるとみなし、どのような語尾が後続しても変化しない部分（「走る」の例では {hasir} の部分）を語幹、語幹に

13 図 7 で示されている形態論的情報のネットワークは子音語幹動詞についてのものであるが、後述するように本稿の分析においては、母音語幹動詞のほうを無標とし、子音語幹動詞は有標なものと考えるため、この点において図 7 のネットワークは必ずしも正確なものではないことに注意されたい。ここでは、形態論的規則も WG のネットワークの一部として組み込むことが可能であるということを明らかにすることを目的としている。

正確を期すのであれば、例えば図 7 の ‘inflection’ ノードと ‘verb’ ノードとの isA 関係の間に、たとえば consonant-final verb（つまり、「子音語幹動詞」というカテゴリー）というノードを認めることで記述的な正確性は保証できると思われる。いわゆる変格活用についても、やはり inflection ノートと verb ノードの中間に irregular verb（つまり、「変格活用動詞」を意図したカテゴリー）を認め、このノードの有する特質が実際の動詞の形態論的規則の決定に対応するとすればよいであろう。本稿では議論を煩雑にするのを避けるためで、個々の形態論的規則の詳細については省略することにしたい。

14 個別の形態論的規則については、このように図で表示する方法の他に、WG の枠組みでは様々な概念について述べた「命題」で表すこともできる。たとえば、今問題になっている命令・終止・未然の各形式については、以下のような命題でその「規則」を表すことが可能である。(i) に示した命題は、本稿 (10) の DM による形態論的規則とほぼ対応していることがわかる。これらの情報は、ネットワークの枠組みで図 7 のように描くことが可能である、ということもできる。

(i) a. The fif of the (consonant-final) imperative verb consists of its base-form followed by {e}.（命令形）
b. The fif of the (consonant-final) non-past tensed verb consists of its base form followed by {u}.（終止形）
c. The fif of the (consonant-final) irrealis verb consists of its base form followed by {a}.（未然形）

WG の枠組みでは、このように命題を平易な (plain) 英語で記述し、ネットワークで曲線の矢印や isA 関係を示す三角形つきの直線で表示する全ての情報が、このような命題の形でも表示可能である。もちろん命題を記述する言語は実際には英語でも日本語でもよいが、ここでは多くの WG の枠組みの先行研究の慣習に従い、英語で示すことにする。この意味では、本稿で提示するネットワーク図の表示がほぼ英語でなされている理由も基本的に同じである。

付着する部分 {a}{i}{u}{e} は活用語尾とみなす。なお、いわゆる終止形と連体形の区別については、少なくとも形態論上両者に差異はないことから、本稿ではひとまず両者の区別を行わず、どちらも non-past tensed verb としてとらえることにする。

ここで重要なことは、WG の枠組みでは形態素と文法的意味が 1 対 1 で直接的に対応するとは考えないということである。これは膠着語としての形態論的特徴を有しているとされる日本語においても有効であると筆者は考える。したがって、たとえばいわゆる否定辞「ない」に前接する「走ら (hasir-a)」の {a} の部分が否定等の何らかの文法的意味に対応していなければならないとは考えないし、いわゆる終止形における {u} も、それ自体は何かの文法的意味に対応するとは考えない。これは、たとえば英語で動詞 likes と名詞 books が共通して有している形式 {s} を考えるとわかりやすいかもしれない。つまり、{s} それ自体が 3 人称単数あるいは複数という文法的意味を持っているのではなく、各語彙の屈折に関する情報と照合した上で文法的意味と関連づけられる、ということである。文法的意味に限らず語彙的意味も含めて、意味と形式は常に語を表すノードを仲介してしか関連づけられないというのが WG の基本的な考えであり（Hudson［2003］）、本稿でもこの考えを支持することとする。

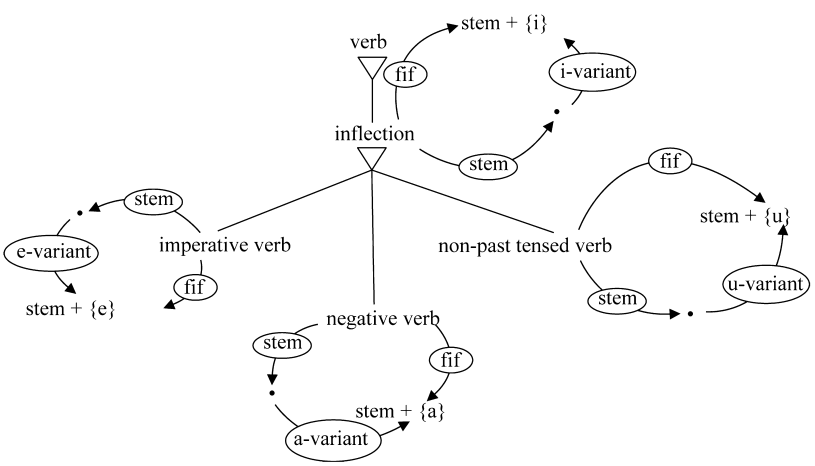


図 7

連用形それ自体を特に独立したカテゴリーとして認める必要がないというこの考えは、一見するとかなり奇妙に見えるかもしれない。しかし、第 3 節で見たように DM の枠組みで連用形を形成する規則が Elsewhere condition であることを考えると、この考えとて決して不自然ではないはずである。むしろ、DM の枠組みでの各活用形式を指定する規則を WG の枠組み、より具体的には屈折カテゴリーの特質の継承という枠組みで言い換えた、ということもできる。また、田川［2008b: 50］自身も指摘しているように、「いわゆる国語学、日本語学と呼ばれる研究領域においては、連用形がおよそ動詞語幹に対応するような、何らかの「小

さな」形態であり、動詞の基本形であるような指摘はしばしばなされてきた」。[16]

本稿の枠組みによる、いわゆる連用形の具体的な各環境に対する分析は第 5 章で行うが、要するに WG の枠組みでは、統語的動機付けとして動詞が図 6 あるいは図 7 における命令形・終止形・未然形というプロパティを継承しない限り、デフォルトとして「連用」の形式が具現化されると説明されると言える。

4.4　子音語幹動詞、母音語幹動詞の区別について

WG の理論的枠組みを提示するにあたり、第 3 節の DM の枠組みでも取り上げられた子音語幹動詞、母音語幹動詞の区別について WG ではどのように考えるかを提示しておく必要がある。第 3 節で、(12) の「走る」（子音語幹動詞）、「見る」（母音語幹動詞）について DM の枠組みで（句）構造が提示されたが、それに対抗する形で WG のネットワークを提示するとすれば、概略図 8 のようになると思われる。

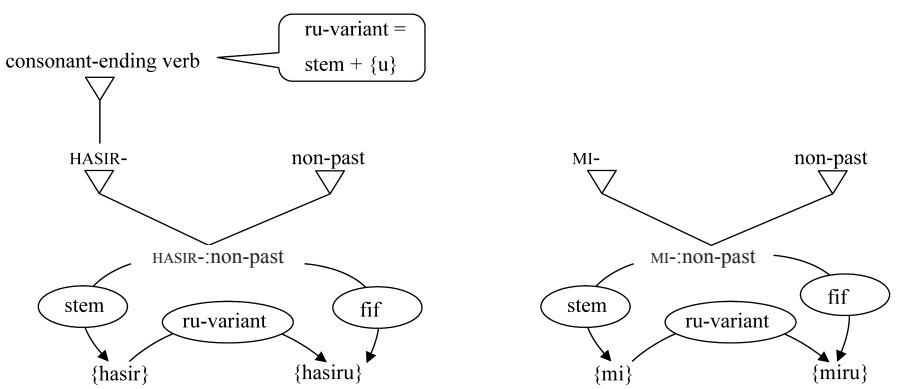


図 8

図 8 では、子音語幹動詞「走る」、母音語幹動詞「見る」それぞれの終止形の具現化について順に左部分、右部分に表示したが、語彙素（ここでは便宜的に HASIR- と記す）の上位カテゴリーとして、さらに「子音語幹動詞」を認めるのがここでのポイントである。

直感的には日本語の動詞において子音語幹動詞が圧倒的に多いことから、子音語幹動詞でなく母音語幹動詞をデフォルトとすることは議論を呼ぶかもしれないが、本稿ではあえて母音語幹をデフォルトであると提案しておきたい。そうすることにより、母音語幹動詞の形態論上の振る舞いは基本的に特別な操作を必要とせず、子音語幹動詞の時のみ各活用形

16　たとえばこのことについて田川が参考文献に挙げている村木［2002: 139］にも以下のような記述がある。「なお、助詞などのつかない、動詞の連用形は、中止形・条件形・譲歩形などの名称で同列におかれることがあるが、それは正当ではない。中止形（「たべ」「たべて」）は、接続によるものであり、特定のムード・テンスなどをもたない不定詞ともいえる形式である。」

での接辞付加操作を動機づけることができると考えるのである。つまり、図 8 の左上部分（consonant-ending verb と表示したノード）において、終止形の場合は語基部分に {ru} を付加するという特質があるとし、当該の動詞はその特質を isA 関係により継承すると考えるのである。なお、語基 {hasir} の末尾部分 {r} と、語尾 {ru} はそのままでは重複することになるが、ここではさらに音韻論的制約について詳しく論じることは避け、ある種の不規則な活用が行われた（つまり、日本語の話者は HASIR-: non-past という語の完全形式 (fif) が {hasiru} となることを知識として蓄積している）と考えておく。

一方、「未然形」の具現化については以下図 9 のように考えることにする。

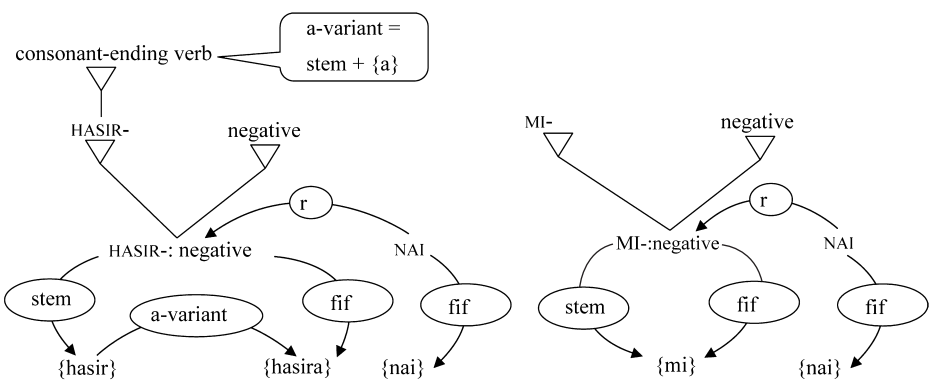


図 9

ここでも否定辞「ない」を統語的に独立した語と扱うか、あるいはある種の屈折接辞として扱うかは議論を呼ぶと思われるが、ここではひとまずある種の助動詞と見なし、動詞部分とは統語的依存関係（暫定的に「共有者 (r)」としておく）があるとひとまず考えることにする。動詞部分の形態について、子音語幹動詞である「走る」については、語幹部分 {hasir} に {a} を付加した変化形式が {hasira} であり、やはりこの {hasira} は語彙素 HASIR-、また屈折 negative (verb) の 2 つのノードから特性を多重継承したノード、HASIR-: negative の fif であるということが示されている。そして DM による説明と同じく、図 9 右図が示すように、「見る」のような母音語幹動詞については、特に変化形式を認める必要がない。したがって語基 {mi} はそれ自体が fif である、と説明できる。

５．各環境における連用形の出現の予測

前節までの議論を踏まえ、本節より第 3 節で紹介した田川［2008a, 2008b］の分析に対して、WG を用いた本稿の枠組みではどのような説明が可能であるかを明らかにしたい。繰り返し述べるように、DM による説明が統語構造（つまり、句構造）それ自体とは独立したいくつかの原理、規則を必要とするのに対し、本節で展開する WG の枠組みは事実上 Parent Valency と Default Inheritance の 2 つの原理のみであるという点が、特に筆者の主張したいポイントである。

まず、(2) の環境「動詞の直後に取り立て詞が介在する場合に現れる」場合の構造では、(22b) のような構造が与えられていた。

(22=14) a. 弟を殴りすらする。

b. $[_{TP}[_{VP}[_{XP}[_{VP}$ 弟を nagur] すら $]t_i]$ する $_i]$

田川［2008a］では、動詞「する」が VP から TP へ移動し、動詞「殴る」が時制要素と関係がもてないために連用形が導かれるという説明がなされていた。では、WG では (22) のような構造に対してどのような説明ができるであろうか。筆者の提案する分析は、概略図 10 のようになる。

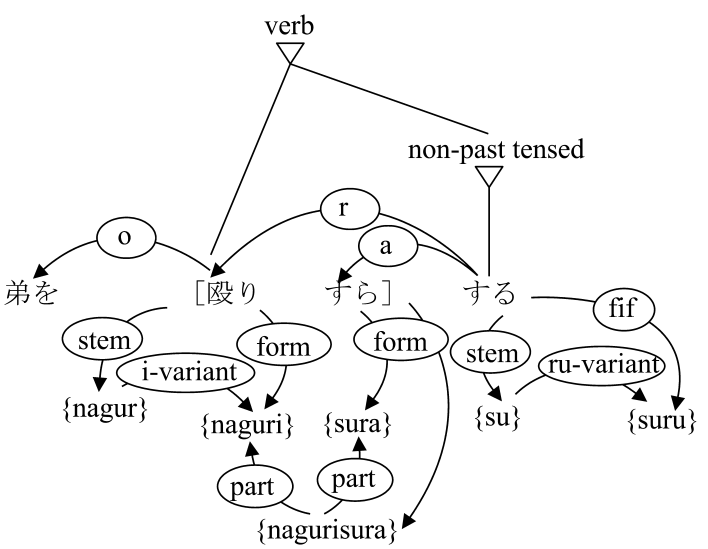


図 10

図 10 において、統語論はすでに第 4 節で述べたように語どうしの依存関係により説明される。また、WG では移動や変形と言った操作は使用しない。このような例では、図 11 が示すように「弟を」と「殴り」との目的語 (object) 関係、「すら」と「する」との付加語 (adjunct) の関係、さらに「殴り」と「する」が主語を共有する関係 (sharer) の 3 本の曲線の矢印だけ

で表示される、きわめて単純な統語構造を仮定するだけで十分である。[17]

さて、この文には2つの動詞（「殴り」と「する」）が存在するが、「する」のほうは語レヴェルで「終止」のカテゴリー (non-past tensed) と isA 関係にあるので、終止形動詞の有する特性をそのまま継承するため、語形は {suru} であることが導き出される。一方「殴り」のほうは、特に活用（屈折）カテゴリーから何も特別な特性を継承することがない。したがってデフォルトの特質、形態論レヴェルでは {i}（または /i/）が付加された形、{naguri} となって具現化されることが予測可能となるのである。ここで強調しておきたいのは、(22b) のような分析と違い、WG の分析ではそもそも統語論も形態論も同一の手法（概念のネットワーク）で説明されることからもわかるように、DM や生成文法が仮定しているような統語部門、形態部門といったモジュールを仮定する必要がないということである。あわせて、WG では文の統語構造は語と語の依存関係が組み合わさったものとして表示される。ある語が別の語に依存するとき、最初の語を依存語 (dependent)、依存語を支配する語を主要語 (parent) と呼ぶ。これらはそれぞれ句構造でいう補部（または付加部）、主要部におおよそ対応する。また、依存語が主要語に依存するとき、通常依存語の形式を決定するのは主要語であることが含意されている。

依存関係を個々に認めていくと、文の中では最終的に1つだけどの語にも依存しない語（WG ではこの語をセンテンス・ルートと呼んでいる）が残ることになる（たとえば、(22) の例では「する」は文中のどの語にも依存していない）が、この語を除き文中の全ての語は別の語に統語的に依存していなければならない。これは WG の枠組みでは Parent Valency、つまりセンテンス・ルートとなる語を除き、文中のいかなる語も主要語を最低1つ有していなければならないという原理として保証されている。[18] これは、田川［2008a, 2008b］の枠

17　図 11 では比較的単純な統語的依存関係を認定したが、一方で形態論上はやや複雑な構造をしているようである。すなわち、助詞「すら」がある種のクリティックとしての性質を有しており、「殴り」に前接していることを示す必要がある（cf. 青柳［2006］）。WG ではクリティックの説明に、クリティック形式（図 11 では {sura}）と、クリティックが接する語形（同じく図 11 での {naguri}）を構成部分 (part) とする大きな語形（ホスト・フォーム。図 11 では {nagurisura} がそれにあたる）を認めることで、統語上クリティックが独立した語として文中の他の語と統語的関係を有する一方、形態論上はホスト・フォームの一部であり、この語形内部の形態素配列規則に生起位置を支配されていることを説明する (Hudson [2001], Hudson [2007])。ここではクリティックの問題には深く立ち入らないが、重要なポイントはいずれにせよ「殴り」の部分がデフォルト以外の値を継承できず、最終的には「連用形」として具現化されることである。また、「殴り」と「すら」との間の統語的依存関係を図 11 では表示していないが、両者の間に本当に統語的依存関係がないかも検討を要する。本稿ではこの問題には立ち入らず、別稿に委ねることにする。

18 これは以前の WG の枠組みにおける「懸垂不可原理」(No-dangling Principle) に相当するものである (cf. Hudson [1998])。この「懸垂不可原理」自体は、「全ての語が（センテンス・ルートを除いて）統語上別の語に依存していなければその文は非文法的である」というものを指している。最近の枠組みでこの原理に置き換わったのが Parent Valency であり、No-dangling Principle の意図することと、主旨としてはほぼ同じであると思われる。

組みで採用された Late Insertion にほぼ対応していると考えてよさそうである。[19]

次に (3) の環境、「一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接する形態として現れる」場合についても WG の立場の分析を提示しておこう。DM の説明は、そもそもそれら（つまり、助動詞や接続形式）がとる補文内に TP レヴェルの投射が現れないということであった。

(23=15) a. * 私がやったます。
b. * テレビを見たながら論文を読んだ。
c. * 本を買ったに行った。

WG の枠組みによる分析も、実質 DM と同じ内容の説明が可能であろう。すなわち動詞部分が「ます」のような助動詞や「ながら」「に」のような接続形式に統語的に依存するとき、動詞は少なくとも「終止形」「命令形」といった屈折カテゴリーと isA 関係を有することができないとすればよい。以下図 11 で、(3) の例「彼女は今にも泣きそうだ」という文について、WG のネットワークによる分析を以下のように提示する。[20]

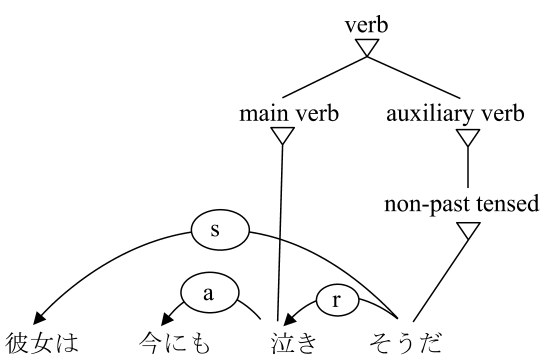


図 11

図 11 で示すように、助動詞に統語的に依存する動詞語幹はいずれの屈折カテゴリーとも isA 関係を持つことができないため、連用形となることが問題なく予測できる。

---

19 全く同じであるとは言っていない。つまり、形態（形式）の決定に統語構造が関与することに言及しているという意味で、DM の late insertion という宣言には WG の Parent Valency という原理が対応している、ということを意図している。

20 WG の枠組みにおいて、「今にも」「そうだ」がさらに統語的に分解できるかどうかについては判断を保留し、ひとまず 1 語として分析することにする。また、「そうだ」については助動詞としてここでは解釈しておく。それゆえ、「泣き」「そうだ」ともに、主語を共有する関係として「そうだ」を主要語とする統語的依存関係があるとここでは仮定しておく。なお、図 11 のうち「今にも」と「泣き」の間に認められた依存関係のラベル “a” は、両者の統語関係が「付加語」(adjunct) の関係であることを表している。

次に (4) の環境、「ある種の接頭辞や語彙的要素が付加する場合に、「X＋動詞連用形＋する」という連鎖の一部として現れる」場合の説明の手法は、DM の場合とは多少異なる。DM の枠組みでは (16) で示したように、接頭辞「小」のような要素が動詞に付加することによって上位の主要部へ移動することができなくなるというのが重要なポイントであったが、すでに述べたように WG では移動という枠組みを使用しない。そこで、(23) のような例では、まず (i) 動詞から派生した名詞「小走り」は動詞「する」に統語的に依存しており（したがって、(ii)「小走り」は語彙関係 (lexical relation) のネットワークで動詞「走る (HASIR-)」から派生して名詞として生成された語彙であり、必然的に一般的なカテゴリー「名詞」(noun) と isA 関係があり（つまり、“kobashiri isA noun”）の特性を継承する、さらに (iii)「* 小走る」のような形式が不適格なのは、この語彙関係ネットワークにおいて「小走り」という語が動詞ではなく名詞の特性を継承し、そもそも名詞自体が終止形や命令形といったようないずれの屈折カテゴリーとも isA 関係を結ぶことができない、とするのである。このため、問題となっている「走り」の部分はこれらの特質を継承することができず、自然に形式としてはデフォルトである「連用形」が現れるしかないのである。以上のことを踏まえ、(24) の例について関連する WG の枠組みの分析を図で表すと、概略図 12 のようになると思われる。図 12 左図では語彙素「小走り (KOBASIRI)」が「走る (HASIR-)」と何らかの語彙的関係をもちつつ、動詞ではなく名詞の特質を継承していることを表している。同中央図は「小走りする」という構造の統語的依存関係と同時に、動詞「する (SU-)」の依存語として名詞か形容詞が要求され（この場合は名詞が依存語として要求されると考えられる）、かつその統語関係は主語を共有する関係であること、そして図 12 右図では、「*小走る」が不適格である理由を表示した。すなわち、「小走り」という語それ自体が動詞ではなく名詞の一種であるので、動詞の屈折カテゴリーから命令形・終止等いずれの特性も継承することができず、本稿で言う「終止形」の形式としては不適格であると説明できる。

(24=16a) 小走りする

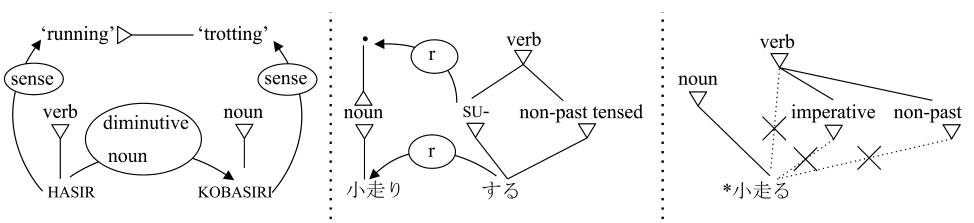


図 12

(5) の「動詞句や動詞そのものに付加し範疇を変化させる接尾辞の前に現れる」ような環境、あるいは (6) の「複合語の要素として現れる」ような環境においても、やはり WG の枠組みでは上述のような説明を与えることができよう。すなわち、これらの環境下では、(5) の例

における「降り方」、(6) の「走り続ける」の下線部で示された語のいずれも、形態論上は複合語の構成要素である一方、統語的には「方」「続ける」にそれぞれ依存している。このとき「方」も「続ける」も、それぞれの依存語が動詞というカテゴリーそのものと isA 関係を有することはできても、終止形や命令形などの屈折カテゴリーのいずれとも isA 関係をもつことを許さない（したがって図 13 の右図と類似した説明が可能である）、とすればよい。以上のことから、WG でも語形成に関わる要素として動詞が全て連用形で出現することが説明できる。

(7) の環境、すなわち「連用形そのままで名詞として使用される場合」も説明の仕方は (5)(6) の各例と変わらない。つまり、「泳ぎ」「走り」などの形式は動詞の一例であると同時に名詞の一例であり、第 4 節で論じたように複合的に isA 関係を構築する。このとき、やはり終止形・命令形・未然形等いずれの屈折的特性も継承できないため、音韻・形態上語幹に {i}（あるいは /i/）を付加して具現化するため、「連用形」であることが導き出せるのである。田川［2008a］,［2009b］では、連用形それ自体が名詞化の機能を果たすのではなく、統語的に名詞として認可された時点でこの要素が直接 T[-past] と関係を持つ可能性はなくなると指摘していることを第 3 節で紹介したが、これとほぼ同様の説明が WG でも可能である。すなわち、前述したように WG の統語構造においては、基本的にセンテンス・ルートを除く全ての語が別の語に統語的に依存しなければならないが、[21] 主要語の特性の一つとして、依存語がどのような形式をとるかは主要語が決定するというものがある（たとえば英語の “I like him.” という例で、him は like に目的語として依存しているが、him がその形で現れる（かつ、*he のような形では目的語として現れない）のは him の主要語である like が決定している）。したがって、「泳ぎ」「走り」と言った語は（それ自体が名詞述語文のセンテンス・ルートでない限りは）統語的に他の語に依存することになり、名詞として用いられるかどうかはこれら連用形名詞の主要語に委ねられている、とすればよいのである。この結果、WG と DM（(17) の例を参照）とを比較すると、DM が連用形名詞を説明するためには語彙レヴェルの構造を仮定してゼロ範疇を N の部分に仮定しなければならないのに対し、WG は複合的 isA 関係に基づく特質継承だけで連用形名詞の特性を説明できていることを指摘しておきたい。

ここまでの分析にくわえて、3.4 節で論じた二つの環境下における連用形の出現について、WG ではどのように考えることができるかをここでは論じておきたい。まずは、非過去形と過去形の非対称性について、(18) の例を再び考察することにしよう。

(25=18) a. 指す (sas-u)（終止形）
b. 指した (sas-i ta)（連用形）

21 センテンス・ルートとは、「全ての語を直接・間接的に支配する語」のことを指す。たとえば (21) の例でいえば、「する」がこの文の中でどの語にも統語的に依存していないセンテンス・ルートである。

ここでの問題は、WG の枠組みで (25b) のように「た」を伴う過去形を形成するとき、音便化を伴う語幹でない限り連用形が出現することを予測できるかどうか、ということである。本稿におけるこの問いへの回答は、やはりこれまで提示した説明と類似したものとなる。すなわち、(25b) では「指し」は「た」に統語的に依存するが、このとき主要語である「た」の指定により、依存語「指し」は動詞の特性は継承できるが、終止、命令等の屈折カテゴリーを継承することは許されない。また、動詞「指す (SAS-)」は音便に関する特性についてもいずれのカテゴリーからも特性を継承しないため、動詞のデフォルトの値である連用形として出現することが予測できる。このような分析の手法においては、DM と同じく時制の対立を同じ形態・統語的サイズの形式で表示することができないことが問題に思われるかもしれないが、そもそも現在・過去の文法的カテゴリーの対立が常に同じ形態・統語的サイズであるということそれ自体、経験的な裏付けがあるとは言えない。

前出の (19) のように、いわゆるテ形節に前接する場合についても WG の立場からの解答を提示しておきたい。

(26=19)　太郎はおもちゃを壊して、母親に怒られるに違いない。
(27=20)　a. 太郎はおもちゃを壊し（* た）て、母親に怒られた。
　　b. * 太郎はいつもおもちゃを壊すて、母親に怒られる。

田川［2008a］［2008b］では、(27) の例から、時制に関する素性 [±Past] が削除されると仮定することで従属節の動詞が [±Past] 素性のいずれとも関連を持つことができないとすることをすでに第 3 節で確認した。一方、WG の枠組みではある要素の「削除」のような操作を理論内で正当化できないため、別の方法での説明が必要になる。ただ、ここでは「動詞＋テ」の複合体がそのまま従属節の統語的・意味的特性に密接に関与することもあり、議論するべきことが多いことは指摘しておかねばならない。いわゆる「テ形節」に関する統語的・意味的特性（特にテ形節の示す「時間」に関連する解釈）については、WG の立場でどのように扱うべきかを提示することも含め、本稿では詳細に論じることは避けたいが、[22] 少なくとも田川［2008a］［2008b］の手法と平行した形で、「て」に前置する動詞が連用形として具現する理由について、解答を提示することは可能である。すなわち WG の枠組みで言うならば、「て」は動詞部分に対する統語的主要語であり、「て」の要求により、依存語である動詞形式はやはり特別な屈折カテゴリーを継承することができないと説明する方法が考えられる。この点で、このような例に対する説明の手法は図 10, 11, 12 で提示したものときわめて類似していると言ってよい。

22 テ形節と時制（あるいはアスペクトも含めた「時」をここでは指している。佐藤［1996］はこれを「時称的解釈」と名付けている）に関する要素について、生成文法の枠組みによる議論については、筆者の知る限りでは三原［1997］、佐藤［1996］、内丸［2006］などが詳しい。

6．おわりに

本稿では「日本語における動詞連用形の出現の予測」をテーマに、DM を用いた田川［2008a］［2008b］の分析に対して WG を用いた説明も十分有効であることを提示した。WG の枠組みにおいては、終止形・命令形・未然形といった特定の屈折カテゴリーを動詞が何らかの動機や理由により継承できないときに、デフォルトの値として適用されることで連用形が具現化するということになる。この手法は、DM において Elsewhere condition により、他の候補と比べて最も指定の少ない連用形規則が適用されると論じた田川［2008a］, 田川［2008b］の手法ときわめて類似したものと言える。ただ、いくつかの例では DM の枠組みでも (14) のようにある要素が構造上別の位置に移動するなど、統語的環境に応じて移動や削除など、個別に理論上の操作を必要とするのに対し、WG の枠組みではどのような現象に対してもあらかじめ理論上定められている原理（Parent Valency と Default Inheritance）を前提とした単一的なネットワークという枠組みで説明でき、要素の移動や削除などといった複雑な操作を必要としない点においてより優れていると主張したい。

本稿の分析に関連する課題として、音便形の具現についてどのように説明するか、また形容詞や形容動詞の活用をどのように説明するかと言った問題が挙げられる。いずれも別稿に委ねることとしたい。

【参考文献】

Bloch, Bernard, 1946, Studies in Colloquial Japanese I: Inflection, *Journal of the American Oriental Society* 66, 97-109.

Creider, Chet and Hudson, Richard, 1999, Inflectional morphology in Word Grammar, *Lingua* 107, 163-187.

Halle, Morris and Alec Marantz, 1993, Distributed Morphology and the Pieces of Inflection, in Hale, K. and Keyser, S-J. (ed.) *The View from Building 20,* Cambridge/Massachusetts, MIT Press, 111-176.

Haspelmath, Martin and Sims D. Andrea, 2010, *Understanding Morphology* (2nd edition). London: Hodder Education.

Hudson, Richard, 1998, *English Grammar,* London, Routledge.

Hudson, Richard, 2006, What is Word Grammar? In Sugayama K., and Hudson, R. A. (ed) *Word Grammar: New Perspectives on a Theory of Language Structure,* London, Continuum. 3-32.

Hudson, Richard, 2007, *Networks: The New Word Grammar,* Oxford, Oxford University Press.

Hudson, Richard, 2010, *An introduction to Word Grammar,* Cambridge, Cambridge University Press.

影山太郎，1993,『文法と語形成』，ひつじ書房，東京.

三原健一，1997,「連用形の時制指定について」,『日本語科学』1，国立国語研究所，東京. 25-35.

三原健一，2011,「活用形と句構造」、『日本語文法』11 巻 1 号、日本語文法学会．71-87.

村木新次郎，2002，「連用形の範囲とその問題点」，『国文学解釈と鑑賞』67-1，135-139.

佐藤直人，1996，「『テ』で導かれる句の構造的な大きさと時称的解釈」，『新潟大学国語国文学会誌』38: 17-38.

Shibatani, Masayoshi, 1990, *The Languages of Japan,* Cambridge, Cambridge University Press.

鈴木重幸，1972，『日本語文法・形態論』，むぎ書房；東京.

田川拓海，2005，「動詞と形容詞の形態統語論的な相違点について」，『筑波大学応用言語学研究』12，筑波大学人文社会科学研究科応用言語学研究室，71-84.

田川拓海，2008a，「分散形態論による活用への統語論的アプローチ ― 現代日本語における動詞連用形の形態統語論的分析 ―」『筑波応用言語学研究』15，筑波大学人文社会科学研究科応用言語学研究室，59-72.

田川拓海，2008b，『分散形態論による動詞の活用と語形成の研究』，筑波大学博士論文.

寺村秀夫 , 1982,『日本語のシンタクスと意味 II』，くろしお出版，東京.

内丸裕佳子，2006，『形態と統語構造との相関 ― テ形節の統語構造を中心に ―』，筑波大学博士論文.

吉村大樹，2008，「ウズベク語の疑問接語 mi の文法的振る舞いについて :Word Grammar による分析」，『大阪大学世界言語研究センター論集』1，155-183.

Yoshimura, Taiki, 2009a, Does the interrogative clitic *mi* in Uzbek head the predicate?, in Kang, Yong-Se (et al.), *Current Issues in Linguistic Interfaces,* Seoul, 235-246, Hankook Munwhasa.

Yoshimura, Taiki, 2009b, How NWG explains agglutination in Turkish, Paper read at the workshop *New Word Grammar at work, Proceeding of the 139th bi-annual conference of Linguistic Society of Japan.*

吉村大樹 , 2010,「*Ahmet kitabı okuyor kalın. はなぜ非文法的なのか ―Word Grammar におけるトルコ語の語順の説明 ―」『大阪大学世界言語研究センター論集』4，79-102.

Yoshimura, Taiki, ms, *A Word Grammar Account of the Grammatical Behaviour of the Interrogative Clitic in Turkish.*

（2011.07.21　受理）